

お国のためなら何でも我慢

筑紫野市 田上 毅

連夜の中学受験勉強で疲れていたのか、深い眠りから父の呼び声によって覚された。

「戦争が始まった。ニュースを聞け」と、大声で起こしているではないか。寝ぼけまなこのままラジオの前に座ると、勇壮な軍艦マーチが流れていて、大本営発表のかん高い声は米英軍と戦闘状態になった事を報じていた。

父は「大変な事が起こった。早めに出勤する」と言いながら、そそくさと出ていった。この日が何と亡国への道を歩み始めた昭和16年12月8日のことであった。緊張した強烈な印象のシーンは臉に焼き付いて、今でもマザマザと浮ぶばかりか、父や大本営発表のニュースは幻聴のように聞こえてくる。

昭和17年4月、無事入学式に参列した際、校長の次席に軍服姿の配属将校が厳然と控えていたのには、大変奇異な感じがしたものだ。

軍事教練は正課のため、入校と同時に配属将校の指揮の下、軍人勸諭奉唱となった。解説はなく、全文暗記が授業で、1ヶ月後には指名されると全員の前で大声による暗誦となり、いつ自分の番かとヒヤヒヤの1時間は実に長かった。

歩兵操典の抜萃(ばっすい)を読み上げると、徒手訓練となり、隊列行進の「歩調取れ」や「気を付け」「教官殿に対して敬礼」「頭中(かしらなか)」「直れ」の号令調整は、「声が小さい」と何回もかけ直されて、1時間後にはシャガレ声となり、次の授業の素読には大変困り果てた。

2年生になるや、木銃による執銃訓練となった。教官の号令に合わせて「気を付け」「構え銃」「前へ」「突け」「後へ」の反復動作10回は、真冬でも発汗し足にはゲートルの締めつけが痛みとなった。

3年生の教練は銃剣術が加重された。竹製胴、面具、籠手に左胸カバーの防具を付け、木銃による左胸突訓練である。十数人の班別に分かれ、三八式小銃に着剣した長さの木銃で相手の左胸防具を突いた方が勝ちとなる勝ち抜き戦を行った。

実銃訓練は、十三年式単発村田銃、装具は弾薬盒、ヤタガン式銃剣が帯革とセットになっていた。銃は明治13年製、口径は11mmもあって重たかった。「気を付け」「担え銃」までは良かったが、「伏せ」「葡萄(ほふく)前進」は重い銃を両手で支え持ち、左右の肘を交互に動かす腹這い状態の前進で、これは実に辛かった。教官の機嫌の良し悪しが影響して、数回の時は立ち上がれないほどであった。

5月下旬には、勤労奉仕として、糸島地区へ1週間宿泊の麦刈作業になった。夜間行軍を兼ね、午前零時に学校を出発した。3時頃になると眠気がさし、ついふらふらと隊列を離れる級友がいて、相互に注意しながら行軍をしていると、朝日に映える糸島富士が見え始め、6時頃

目的地に到着した。

作業地の割当てが終了し、友人とともに2名は出征軍人留守宅になった。約30坪のわら葺き家の前に広がる四段位の麦畑が作業場であり、40才位の母親と16才くらいの娘2名が留守宅を守っていた。

第1日目は午後から鎌研ぎを教わり、刈り方は実地指導になった。麦穂を左手でつかみ、右手の鎌で根本をザックと切る動作は、腰と膝を曲げて30分もすると両方とも痛くなる。腰を伸ばしては刈るものの、麦穂の先が頬をチクチクと刺し回り、不快このうえない。15時頃、15分間の休憩は麦茶のみで、腹の虫がグーグーいい始める始末であった。初日ということからか、18時頃休止した時は眠気と疲れが出て、大の字になってグッスリ眠りたかった。

夕食は米飯、漬物、味噌汁の一汁一菜でも、空腹にはご馳走であった。

入浴は五右衛門風呂。薄暗くて、水面に円板が浮んでいる。取り出して入った途端、足の裏は火傷せんくらいの熱さに仰天、「熱い」と大声を上げ、洗い場へ跳びおりた。友人は何事かと走って来た。理由を話してもピンとこない。よく考えると十返舎一九の膝栗毛を思い出し、板は底板だと分かり、二人で『弥次喜多は笑えんな』と大笑いし、板を足で底まで押し沈めて騒動落ち着いた。

第2日目は早朝5時起床、朝食は昨夜の味噌汁をおかずにかき込み、直ちに作業開始、昨日のヒリヒリ頬や首筋を再び麦穂がイタブリだす。早朝とはいえ、汗は昼間と比べて少ないが、重労働だからいやでもふき出し、麦穂との擦過と相まって、痛痒ようになってきた。

昼食は握り飯に沢庵、15時頃一休み、暗くなるまで作業は続き、19時半頃帰宅の日課には閉口した。夕食は昨夜と同様、入浴は失敗なくスムーズに終了した。

第3日目、5時頃起床し、外のトイレでの用足しの帰りに風呂場を通る時、何気なく風呂釜を見た。窓から朝日が差し込んでいて、湯水が白濁し、ミルクのようになっていた。

朝食時、母親に「風呂の薬湯は何か」と尋ねたら、娘が不審気な顔で「何も入れていない」と答えた。「白くなっているのはなぜか」と聞くと、母親が「水を毎日代えると、わらが余分にいる。3回は使う」と言う。娘は何の事かと思惑顔、ようやく分かった。湯水の白濁は汚れであると悟り、この日から入ったふりをして冷水浴となったが、疲れと汗で汚れた体は全然休まらず、体中何か臭うような気ばかりした。

第4日目はもうウンザリ。第5日目は『早く1週間がたたないかなー』とボヤキの連発。第6日目になり、明日は帰れるからと張り切りは気分だけ。体のアチコチはこりだらけで、手足は思うように動かぬ。最終日は昼食後、全員集合し、解散は現地か学校か定かでない。

帰宅後の夕食は、母の心尽くしのご馳走に舌鼓を打ち、家庭の良さを味い、幸福感一杯だった。

ようやく学校の授業に喜んだのも束の間、7月始めには軍役奉仕として、蓆田(むしろだ)飛行場の建設工事に従事することとなった。

当時は広がったとはいえ、未完成のためモッコ担ぎは多数の人力作業を必要としていた。モ

スコップは縄を50mm四方に編み、四隅に紐をつけ、丸太棒に吊して土を入れる原始的運搬用具である。

あいにくの梅雨空は雨を惜しみなく降りそそぎ、雨にも負けず風に負けずの突貫工事は休みなく続行された。粘土質の泥土は靴底にへバリつき、泥の塊はスコップ落しも役立たず、モッコの土は水ぶくれで重たくなる、二重苦が期間中続いた。まして、相棒がすぐへばるのには全く困惑の極み、早く終わる事を願った。

4日目頃、昼前15名位の白人捕虜がトラックで運ばれて来た。数個の石を積み上げると、昼食になった。遠目ではあったが、白パンに缶詰の副食は目にまぶしかった。麦まじりの握り飯と泥水様の溝で洗う手は綺麗にならず、土がついたまま口に入れるのは惨めに感じられた。

長い1週間が過ぎ、今度は夏休みを返上し、工場動員令が発令された。

翌週、学校に於て、4クラスは九州兵器（現春日公園）、我々1クラスのみ鐘ヶ淵紡績工場（現キャナルシティ福岡建設地）に決定された。

翌工場出勤第1日目は、飛行機に関する講義から始まった。特にジュラルミンSDH等の成分、加工、効用、用途等は詳細な説明があった。

第2日目は、昨日の講義内容のテストが不意打ちになされた。テストとは夢にも思わなかったもので、ノートはしたものの、いい加減に聞いていた。結果次第で配属箇所が決まるということだった。小生の点数は悪いと思っていたら、何と工場内では重要部門とされる零式水上偵察機の下面タンク成形箇所になった。

工場は天井が高く、屋根はガラス張りのため明るく、通路は広く、1棟は約3000㎡のが5棟ぐらい連なり、飛行機製作には最適と思われた。

3日後、部所に申告、級友3名とともに勤続数十年の中年工員の指導を受けることになった。工具の使用方を説明したら、即刻実習と言い渡された。下面タンクは、ジュラルミンSDH縦1m、横1m半大を主翼下にはめ込むインテグラルタンク板である。4本の枠をびょう止めして、内側びょう凸部分をタガネで削り落とし、木製ゲージにより修正し完成品となる。びょう止めは、沈頭びょう約50個をドリル穴に差し込み、びょう尻をエヤーハンマーで叩き、反対側を鉄製押さえで固定する作業は、息が合わぬと表面に傷をつけ、おしゃかを作る。最初は慎重過ぎて能率は悪かったが、2ヶ月もすると工員の助言で習熟し一任された。

3ヶ月経過すると余裕が生じ、周囲が見えるようになった。少し離れた所には、福岡女学院4年生が5名程作業していた。赤いネクタイにモンペ姿は、やはり粋なスタイルであった。担任教師の女学生との会話禁止の厳命は重たく、通路ですれ違っても無言のまま通り過ぎるのが常であり、1年上の彼女達は大人びて見え、姉様という感じはしなかった。女学生は大分佐伯高女生も働いていた。寮生活と聞き、不自由だなと同情したものだが、平然としていた。

昭和19年11月には、大牟田地区の工場街が空襲を受け、多数の死者と焼失家屋を生じ、翌3月には、空襲警報の発令回数が多くなり、退避壕の中でのズシンズシンの爆裂音と地響きは、後日太刀洗飛行場の爆撃の音響だと仄聞した。

当日佐賀から通勤中、鳥栖駅のホームから再々、豆粒程のB29編隊がキラキラと輝きながら飛行中を望見し、今日の目標はどこかと思ひ、できることなら叩き落としてやりたかった。

20年4月頃、雑餉隈の渡辺飛行機製作所に部品調達した際、小生達の丹誠こめた下面タンクが、片隅に何十枚も積み上げられていた。それに鐘紡組立のK11（白菊機上作業練習機）も、胴体のままエンジンなしの状態には落胆した。聞けば空襲の被害がひどく、エンジンが到着しないとのことには、戦争の先行きが不安になった。

同年6月19日には福岡市が焼土となり、博多駅から湾内の沈船が見えるようになった。やがて8月15日、遂に敗戦となった。

「欲しがりません。勝つまでは」のスローガンを信じ、困苦に耐え、何事もお国のためと思ひ続けてきたことは一体何であったのかと、疑問は失望に変わった。

戦後半世紀となった今、戦争の悲惨さは反省されず、紛争は絶えた事がない。

日本国憲法は平和主義を根柢とする。今こそ日本人は、戦争の悲惨さを全世界に訴求し、核廃絶を断行し、世界平和を創建する努力をすべきではないだろうか。